

ガタピシステム GATAPISystem

松平 和也

Kazuya Matsudaira

(株)システム総研 代表取締役社長

Systems Research Institute Inc.,CEO

要旨

ガタピシステムという言葉は、合成語である。我他彼此という語とシステムを用いて造語した。ガタピシというのは、仏教用語であり、人間関係の不調和を戒める言葉である。すべからく、人間関係においてギクシャクするのは、我と他人の間で、我は悪くなく、他人に問題がありと、他人のせいにする。自分の我を削ること無く、他人を責めるからいけないと教える。社会におけるガタピシステムが人間の不幸を招来する。毎日のように起こる事件は、このガタピシステムに起因する。システム開発において、ガタピシステムを作らないようにするには、設計者がこの人間の特性に配慮しなければならない。本論では、著者の経験からの設計者向けチェックリストを掲載したので利用されたい。

1. はじめに

情報システム学が『世の中の仕組みを情報システムとして考察し、その本質を捉えてそこに横たわる問題を究明し、そのあり方を改善することを目指す』のであるなら、日々起こる悲惨な事件・事故を減少させるべく情報システム化をこの領域に企画すべきであろう。例えば、2016年10月16日の朝日新聞によると、児童虐待事件により、厚生労働省の統計では2009年から2013年の5年間で444人の子供が死亡している。何の罪も無く奪われる子供の未来の重大性に、厚生労働省の役人は気づいていない。文科省の役人は、いじめ自殺者の多さを口でとなえるだけだ。また、教師、教育委員会がただ頭を下げるだけだ。まだまだ、ある。登校中の小中学生の列への自動車突入事件も嫌な事件だ。世の中の事件を捉えて改善するには、人間活動をありのままに観察し、其処に何が起こっているのかを明らかにする必要がある。人間を、いや人間の内面を“パトゾフィー”的に理解せねばならない。すなわち、多くの事件は、人間の死を含むので、不十分で不完全で補完を要する人間の行動を情報システムの的に把握することで解決の糸口をつかめるのである。この時、本論では、この現行システムを、ガタピシステムと命名する。ワイツゼッカーが唱えたパトゾフィーは、個人の心身と病理から診断する社会の臨床にいたる壮大な学問である。人間を救う情報システムを創り出すには、学問的にも十分な人間理解が前提になる。こうして捉えたガタピシステムを改善しなければ、何時までも悲惨な事件は起こり続け、犠牲者は出る。特に、加害者と被害者の間のインターフェースにおける人間の所作を、パトゾフィー的に深く研究しなければならない。以下の章でガタピシステムの事例を述べる[1]。

2. ガタピシステムの事例1 『アウトプットが無いシステム』

某SI業者が請け負って開発し、運用した有名なシステムが、旧年金システムである。開発から運用にいたる累積支払いは、1兆5千億円を超える巨大なシステムであった。基礎年金番号制度を導入時に、なんと持ち主不明の年金記録が5千万件見つかった。このシステムでは、国民が支払った保険料の一覧表というものが出力されて支払い者に渡されていなかった。国民は、支払伝票を以って年金を払い、そのインプット伝票を持ち続け、それを支払いの証拠にしなければならなかった。著者は、自分の子供が20歳になったときから支払った分を伝票でもちつづけていて、各人が会社勤めになったときに渡して、支払い分を付加してもらおうように子供に言った。問題は二男に発生した。二男は、剛と書いて、ゴウと呼ぶ。なぜか、年金記録にはタケシとなっていたようで、勤め先は、入力してもエラーになる学生時代

分を無視してしまっていたようである。年金システムで利用していた電々公社時代の古い電子計算機は、漢字処理ができず、勝手に入力時タケシと入れていた。そして、新システムで、カタカナでアウトプットしてきた確認書には、確かにタケシという人間ということであり、ゴウは、学生時代はマツダイラタケシであったんだーと一家で笑った。

3. ガタピシステムの事例2『アウトプットが実用に耐えないシステム』

ここでいう、アウトプットとは、情報を利用者に伝える媒体である。電子計算機で印刷される帳票とか、画面などはアウトプットである。情報が利用者の実用に耐えないという場合一般に、3要因ある。

第一の要因は、利用者の質的要求に合致していないことがある。

第二の要因は、利用者のタイミング要求にあっていないことがある。

第三の要因は、量的要求に合致していないことがある。

情報というものは、上の条件をきちんと満たさないと満足できないのである。又も、年金システムであるが、筆者の場合、65歳の時に、年金特別便という待望のアウトプットが家に届いたのである。喜び勇んで見てみたら、愕然とした。なんと、32年間の支払い記録が真っ白なのである。こちらの頭中が真っ白になった。23歳から10年間分しか記録が無いのである。以降、空白の部分のみであった。これも、後に、懸命の修正作業により、32年分の記録を見つけ出し、繋いでもらい正常化した。その間32年間支払った年金が消えてしまったという悪夢を見ているかのようでありました。

4. ガタピシステムの事例3『二重三重システム』

製品とか部品とか、モノの在庫を管理するシステムがある。電子計算機を活用していない『手のシステム』では、在庫台帳があった。この場合、棚卸しをやってみると、必ずというほど、現物の数と在庫台帳現在高の数が合わないのである。その場合、現場の管理者は、通常は現物に合わせて、台帳の数を消して書き直す。現品が多ければ、現品を減らして台帳にあわせるという軽業をやることもある。話のわかる、太っ腹の管理者が居た某自動車会社では、完成車が完成車入庫記録より数台多くあるということもあった。そこで、新車を半額セールで社内処分するなんてこともあった。このようなところに、電子計算機が導入されると以下ようになる。電子計算機のファイルにある在庫高と現場の人が念のため書いて持っている台帳の残高と現物とが合わないということであり、三つの残高があって、どれが正しいのか？電子計算機の残高を直すには、赤伝を切り、修正の黒伝を切るなど厄介である。結果、腹の太い現場管理者が居ると、どうなるか？現物の数こそ彼の目には正しく映る。結局台帳も電子計算機ファイルもほっておかれて、めちゃくちゃになる。これを正しくするには、電子計算機ファイルのみで管理するような、強権を振るう必要が生じる。

以下は、チェックリスト的にガタピシステムの事例を表題だけ掲げるので参考にされたし。

4.1. ガタピシステム例4以降

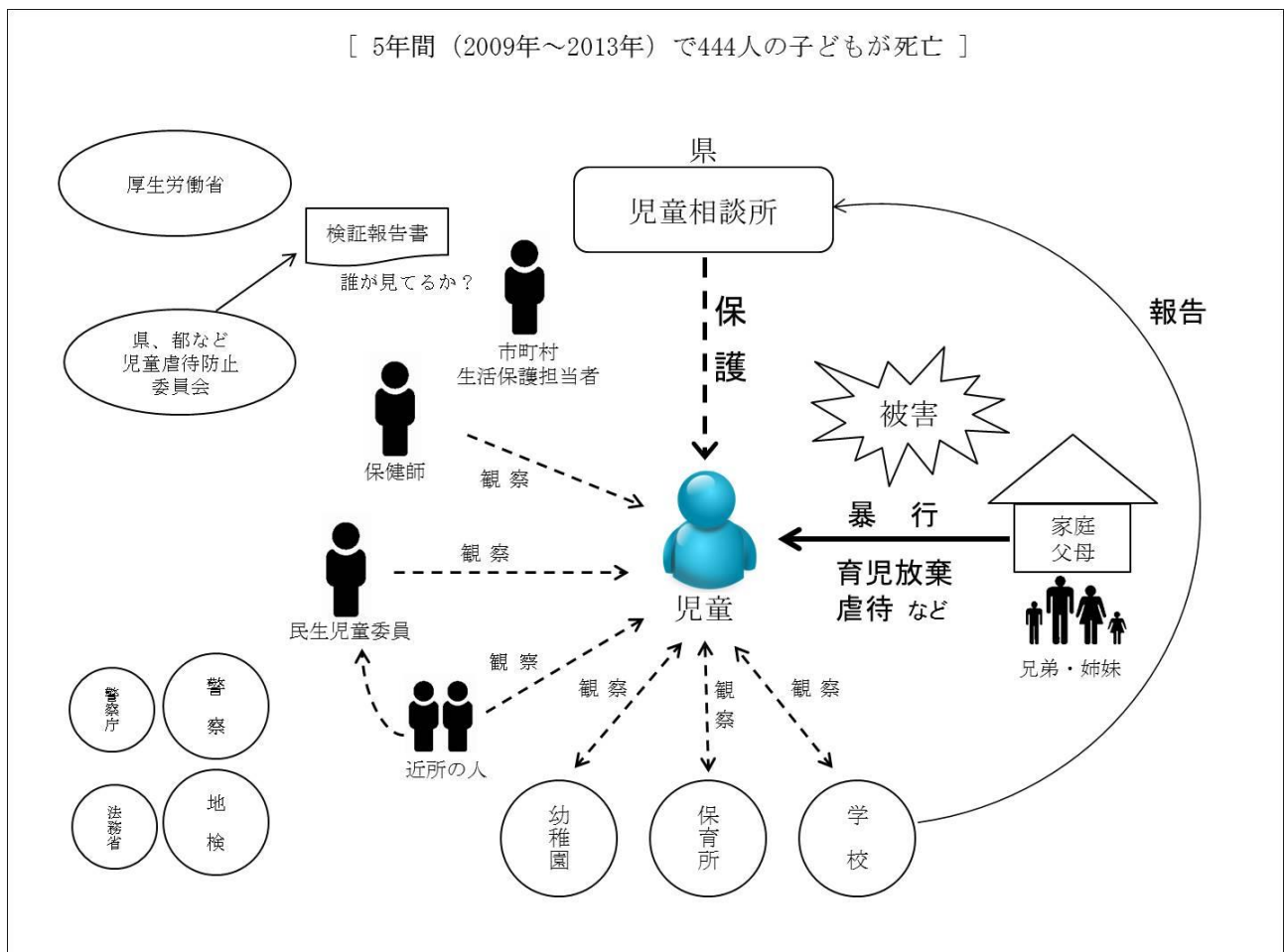
以下には、経験的事例を箇条書き的に掲げる。

- ①部分的電子計算機システム：電子計算機が出力した膨大な途中計算を人間が完結させなければならぬような人間殺人システム
- ②間に合わないシステム：時々遅れて出る給与明細票は人事部が困り又勤務者は給与を手でできない
- ③類似アウトプットが多いシステム：間違っって配布されて現場に混乱が生じる
- ④ベキ論が厳しすぎて現実的でないシステム：住民票コードシステム：住民基本台帳法による
- ⑤人間と電子計算機の分業分担が適切でないシステム：学生教育支援用のシステム
- ⑥権限委譲制度化に対応できないシステム：稟議決済などの業務の電子計算機化
- ⑦データの定義が標準化されていないシステム：社員コード、従業員コード、Employee Codeがある
- ⑧人間の特性が充分考慮されていないシステム：このシステムが一番厄介でシステム化未開拓分野

4.2. 児童虐待事件について

⑧の例では、システムが幼稚で、ガタピシである。例えば、図1は児童虐待事件を図化したものである。関係者を図の上に並べただけである。図の中心には、児童が配置されている。利害関係者が周りに配置されているが、この児童を救う活動をしていない。自治体の児童虐待防止委員会が作る検証報告書は生かされていない。即ち、誰がこれを見て、情報として理解し、原則として対処すべき部門がアクションを起こすことになっているのか、定められていないのである。死亡した児童の7割は3歳までの子供で、殆どのケースで、母親または父親が加害者である。虐待が始まってから、死亡するまでに、児童はSOSのサインを出す。虐待の兆候を、あざや傷で示す。態度でも示す。しかし、児童の周辺の人たちは見逃す。情報は共有されない。誰も責任が無い。筆者自身民生児童委員というのをやったが、区役所や市役所員にいくら厳しく問い合わせても、等閑視されるのみであった。いたいけない児童を、殴る蹴るして、殺したり重い障害児にしてしまう親が居るのだ！パトゾフィー的に学べば、罪を犯す母親、または父親にとっては、それが美しく、誘惑的で、暴力的であるから虐待するのであろう。即ち、父親のオーガズムと出産は結びついているが、子供の育児には結びつかないと言う。彼らの心情を理解し、児童を暴力から救い出さねばならない。普通の子供の育つような安寧の生活環境に戻すには、このガタピシシステムを改善し、殺される児童を激減させたい。

図1 児童虐待事件図



5. まとめ

今、我々の周辺で進展している“マイナンバーシステム”は、ガタピシしており、その存続が危ぶまれるぐらい問題が露呈している。国民全てを共同体として巻き込んだ壮大な情報システムの実現のためには、国民の挙動・所作はいかなるものか、研究があってもしかるべきである。パトスとソフィア合成語、パトゾフィーでは“共同体とは集団の中でパトスの的に感受するものである。それは存在するもの、どこかにあるものではない。予め与えられた事実や実態ではない。”としている。それをあるものとして、ひとからげにしてくくり、個々人に背番号を与える。インターネットを使い、クラウドを適用し、最新のIT技術を適用し国家の目的を達成しようとするには、このシステムは脆弱でもろく危うい。なぜなら、其処に前提する人間がもろいからである。弱くて悪くて、罪深い人間が相手なのである。

人間は、より弱い人間を虐めたり殺したりする。その弱者を救い出すべく情報システムは機能すべきである。弱者；人間が、発するサインは微弱で捕らえがたい。そのサインを的確に捉えて対策し、行動を起こすための情報システム開発が待たれる。事件は続々と絶え間なく発生する。今日も、老老介護者の殺人悲劇が報じられた。明日は独居老人の孤立死が報じられよう。又、教育者の買春事件、女学生の売春事件、政治家の金にまつわる事件、社会は混迷を増すばかり。情報システム化により、この難題を解決することが求められている。ガタピシしない社会を作るには、ガタピシシステムを学ぶことが大事である。我他彼此がガタピシの元語であるなら、他人が悪いので、自分は悪くないとするように、我を通すことが、人間関係において、葛藤を引き起こすのである。親は我を抑えて自分に目を向けてもらい、子供の心に対処してもらえぬかが、虐待防止システムのポイントとなる。

情報システム構築に当り、次の観点を強調したい。障子がガタピシする家があれば、その時、建具屋はその家に訪問し、敷居や鴨居を直し始めることは無い。障子や襖を外し、その建てつけを矯正する。これを鉋で削り、薄い板をはり、スーッとすべるように直す。障子は自分、即ち我であり、他人は敷居である。建具屋は情報システム専門家という役回りである。ベテランの建具屋には生活の知恵（ソフィア）あり、住む人への労りの情熱（パトス）がある。その仕事は速く、美しく、正確である[2]。

参考文献

- [1] ヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼカー、木村敏訳、“パトゾフィー”，みすず書房，2010.
- [2] 大法輪編集部，仏教用語辞典，大法輪閣，1983.